

航空写真家 (株)ジオグラフィック フォト

渡部

WATANABE
Manabu

まなぶ

さんに聞きました

立体的な写真を撮るため 航空写真を始める

——この四月に『都市再生 千フ イート今昔』という、都市の昔と今を空から定点撮影した写真集を出されましたが、航空写真を始められたきっかけはなんだったのですか。

渡部—— コマーシャルフォトの写真家・樋口忠男に師事し、一九六六年に独立しました。当時は百科事典のブームで、学研(学習研究社)が日本地理分野のプロジェクトチームをつくることになり、それに師匠の推薦により加わり、九州や信州・北陸などの撮影をしていました。

高度成長期でしたから、各地に臨海工業地帯ができたのでありますが、たとえばコンビニートの写真を撮るには山に登って俯瞰し

て撮るしかありません。しかし、そういう地形に恵まれたところはまずありません。そこで立体的な写真を撮るために思いついたのが、航空写真だったのです。

——今まで撮られたなかで印象に残っている風景はありますか。

渡部—— 新宿の場合は、京王蒲ラザ一本の時代がずっと続いていたので、その後つぎつぎと高層ビルが建ち、都庁ができ、西の方に徐々に工区が広がっていきました。逆に一気に変わったのがが汐留です。貨物駅だったのが大きく変貌しました。また、十三号地と言っていた臨海副都心も最初は更地で何もありませんでした。そういう意味では、その場所、その場所での変化の意味合いは違っています。

今は高層ビルも各地にできています。耐震強度の引き上げや、

公的機関の土地の放出、企業の土地放出による駅前再開発が進んでいることなどが原因ですが、空から見るとどこも大きく変貌しているのがわかります。

航空撮影の条件は 視程四十キロ以上

——今日は撮れると思っても上がると撮れないということもあるのですか。

渡部—— それは年中です。全国の空港には空港測候所があり、そこで三十分ごとに気象データを観測し、パイロットに空港周辺の気象情報を提供しています。私はそれを電話でとっています。水平方向に見て四〇キロの視程がないと飛びません。スモッグというのは、主に地表から二千米トル前後に溜まります。私が狙う



聞き手



溝淵利明
編集委員

[writer] 駒崎文男
[photo] 崔 健三

一番いい条件は、雨が降って、北西の風が吹き出す、西高東低の気圧配置のときで、季節的には秋から冬にかけてが、ベストです。関東平野の場合は、南アルプス、北アルプス、上越国境の山々

があるので、日本海で吸った水分は雪として落とされ、からっ風となります。ですから関東は撮影がしやすいのですが、やりにくいのは大阪です。兵庫県と岡山県の県境から高い山が遮られ、季節風が吹くと、日本海の雪雲が流れてくるのです。また、西風になると、瀬戸内の工場地帯の煙が風に乗って流されてきます。大阪湾は後ろに六甲山系があり、生駒山系、葛城山系など、周りを屏風のように山が取り巻いているので、すべて大阪に溜まってし



まうのです。市の中心地中ノ島から生駒山まで直線で結ぶと十キロですから、ヘリをスモッグのある層の上部まで上昇させれば山並みは見えてきますが、その下ではミルク色でほとんど見えないというのが現実です。写真集では神戸と大阪の写真は一ヶ月半待ちに待って撮影しました。

記録を次の世代に 引き継いでいきたい

——並んだ新旧の二枚を見比べ

ると、都市の変貌が歴然とわかります。まさに貴重な記録であり、文化的な遺産ですね。

渡部——今回、写真展も開催しましたが、これらの方も「国の財産ですね」と言ってくださいました。そういう声を聞くと、やってよかつたなと思います。

そもそもカメラの第一義は、記録性にあります。今回はその記録性を活かして、新しい写真との対比で、古いフィルムにスポットを当てました。まち並みもある種の日本の文化だと思っております。ただ、まち並みは至るところで変わっていき、留まることなく、常に再生されていきます。たとえば、鉄板に囲まれたなかで解体工事が始まると、「ここなんだっけ」と思っても思い出せないということがよくあります。私が住んでいる千葉のニュータウンも三十年前に越した頃は多くが若い世代でしたが、今は犬もヨボヨボだし、連れている人もヨボヨボになってきています。そして、世代交代で家の建て替えが始まり、まち並みすらも変わっていきま

す。そうしたまちの姿を記録に留めることは大切だと思うので

す。ですからいま、自分の手元にあるフィルムをデジタルに取り込み、少しでも保存できる状態を考えなければいけないと、パソコンを全部買い換えて準備を始めたところでした。しかし、自分一人の力では記録に残す年数も限られます。今回の写真展でお世話になった方への礼状に「この後、新たな志をもって引き継いでくれる方が現れることを切に望みます」ということを書きました。誰かがこうした記録を続けてほしいと願っています。

個人的には、十年、十五年経てばまた変わっていくでしょうから、もう一度撮影して三つ目を並べることができたらとは思っています。

——まちの再生のためにも、記録もしくは記憶に残すことは非常に大切なことです。こうした写真を学生や一般の方々にも見てもらいたいものです。次の写真集が出るのを楽しみにしていますので、ぜひ頑張ってください。本日はありがとうございました。